

### 第3章

## 評価方法：ルーブリック・ポートフォリオ・評価の概要

曾 我 雄 司

SGH調書において、「総合人間科（総人）の検証評価方法」は以下のように記されている。

中学総人（幅広い興味関心を育成するための「課題研究Ⅰ」）については、「プレゼンテーションや討論によるパフォーマンス評価。提出物によるポートフォリオ評価。2つの評価結果を蓄積し、高校での「課題探究Ⅱ」の評価に繋げる」、高校総人（仮説検証型課題研究を行う「課題探究Ⅱ」）については、「プレゼンテーションや討論を通してのパフォーマンス評価、提出物によるポートフォリオ評価を行う。学年間で評価の継続性を持たせるため、各学年で行った評価を次の学年の評価につなげる。高大接続入試を検討するための資料とする」（下線部は、筆者による）。要約すれば、パフォーマンス評価とポートフォリオ評価を評価方法とするということであり、その際、評価の継続性を考慮すること（中学と高校の継続性、高校1年生～3年生までの評価の継続性）、高大接続入試の検討資料とすることも考慮するということである。

パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価については近年注目され、多くの書籍で紹介されているので、ここでは深く立ち入らない。これらの評価のためには、指標となるルーブリックの作成が必須となるため、今年度の評価計画としては、そのためのデータ収集と試行、ルーブリックの作成、意識調査アンケート尺度作成のためのデータ収集などが計画されている。ここでは、パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価をするためのルーブリック作成を中心に報告する。

ルーブリック作成のためには、評価項目を設定し、達成度に応じたグレードの付け方を検討する必要がある。そのためには、本校のSGHプログラム・総合人間科でどのような力を育てたいかという観点と、実際のプログラムの中でどのような力を測ることができるかという観点の両方から検討していく必要がある。

まずSGH調書をもとに、SGHプログラム・総合人間科で育てたい力を整理する（下線は筆者による。また〔 〕は必要に応じて補ったものである）。

調書冒頭の研究開発の目的・目標の項では、大目標として育成する「自立した学習者」の特色を述べている。それらを箇条書きで整理すると、以下ようになる。

- ・物事の本質を、地球規模（国際的視野）で捉える
- ・既存かつ潜在的な問題の発見ができる
- ・論理的・多元的に〔問題を〕考える力を持つ
- ・〔自分の力で〕探究し続ける勇気と判断力を持つ
- ・他者と協同して問題解決ができる〔国際的素養〕
- ・自らの考えを適切な方法で論理的に他者に表現できる」。

また各論で見えていくと、中学総人については、「幅広い興味関心の育成、探求する心の育成を通じて、高校における研究体制の素地を築く」「〔高校の研究テーマにつながる〕幅広い興味関心の育成」「調べ方・まとめ方を身につける〔調べ学習から仮説検証型探究への段階的移行による深化〕。」「個人研究とグループ研究の両方の経験」としている。

高校総人については、「物事の本質をとらえる」「既存の問題と潜在的な問題の発見」「論理的に発見した問題について考える」「多元的に発見した問題について考える（確実な根拠に基づいて仮説を検証する）」「自己将来についてイメージを持つ、進路決定（グローバルキャリアパス）」としている。なお調書の文章には含まれないが、「発見した問題について仮説を立てることができる（仮説検証型探究）」ことや「コミュニケーションをとる力、協同的な問題解決をする力」の育成も視野に入るものと思われる。

以上の記述を踏まえて整理すると、調書から抽出できる評価の方向性・観点は以下の通りになる。

- ① 〈問題設定〉探究すべき適切な問題設定ができているか、それは地球規模の課題であるか
- ② 〈思考〉論理的・多元的に考えることができていますか
- ③ 〈協同性〉探究課題について協同的に考えることができていますか
- ④ 〈表現力〉相手に伝わるようにレポート・発表で表現できていますか

なおルーブリック評価では測りづらいであろう項目（「探究し続ける勇気」など）や、総合的な目標ともいえる項目（「物事の本質をとらえる」）などは、アンケート

調査などで評価するなど、別種の方法を検討している。

次に高校生の総合人間科のプログラムに即して、実際のプログラムの中でどのような力を測ることができるかという観点から整理する。ルーブリックの作成方法として、成果物（アンカー作品）を複数人で評価し、ルーブリックの評価基準を作成するという手法がある。しかし今年度はSGHプログラム1年目ということでまだ成果物はなく、成果物からのルーブリック作成はできない。よって高校3年間のプログラムの流れと、評価できる成果物が何かを考えるとところから、今年度は評価項目などを高校総人について考えた。

本紀要の別の箇所でも詳述されていることと思うが、高校総人のプログラムの流れを大まかにまとめると、以下のようなになる。

- ・高校1年生＝グループに分かれてのProblem Based Learningによる探究学習方法の習得
- ・高校2年生＝興味関心に従っての課題探究学習（個人研究）
- ・高校3年生＝高校2年生の探究の結果を論文にまとめる。プレゼンテーションを行う

また成果物（評価対象物）としては、以下のものが現状で考えられる。

- ・高校1年生＝エビデンスノート、最終レポート、活動の観察
- ・高校2年生＝エビデンスノート、各ターンのまとめレポート
- ・高校3年生＝論文、プレゼンテーション

課題設定・課題分析（「問題」への分割）・研究計画作成・問題解決・結論への到達・レポート作成という一連の流れは高校1年生・2年生とも踏むステップであるので、評価項目として「課題設定」「課題分析」「研究計画」「問題解決」「表現（レポート）」「表現（プレゼン）」の6つを設定した。またこれに「協同性」の項目を付加した。これらの項目は、先にまとめたSGH調書の①～④の評価の方向性・観点と合致することを念頭におきつつ設定している。①〈問題設定〉に対応するのが「課題設定」、②〈思考力〉に対応するのが「課題分析」「研究計画」「問題解決」、③〈協同性〉に対応するのが「協同性」、④〈表現力〉に対応するのが「表現（レポート）」「表現（プレゼン）」である。

ただ学年によって評価できない事項があるので、これを原簿としつつ各学年で評価項目を選ぶ形をとってみた。具体的に説明すると、高校1年生は課題が与えられているため「課題設定」は評価項目に入れられない。ま

た「表現（プレゼン）」についてもその機会がないので、評価項目に入れられない。一方、グループでの話し合いが主体になるため「協同性」の項目が入るが、これは個人研究となる高校2・3年生では取り上げられない項目となる。つまり高校1年生の評価項目は「課題分析」「研究計画」「問題解決」「表現（レポート）」「協同性」の5項目となる。

以上を踏まえて、原ルーブリックとでもいうべきものを作成した（次ページ参照）。横軸に7つの評価項目、縦軸に三段階の評価を設定した。またどの評価項目をどのような成果物で評価するかを、学年別に各評価項目の下に一覧表化した。

評価項目ごとに到達目標を設定し、「B」を基準として記述語を作成した。一年間の総合的な評定は、各評価項目の評価の平均でつけることを想定している。

今年度の運用については、PBLの進め方がまだ試行段階であることなどから、上述した5項目すべてについての評価はできないことなどが当該学年との相談の結果、分かった。そのため「課題分析」「問題解決」「表現（レポート）」「協同性」の4つの評価項目について評価を行うこととした。今後は、今年度の成果物をもとにルーブリックの再検討をすすめ、かつ次年度のプログラムの改善の材料としていく予定である。

評価基準

	課題設定	課題分析	研究計画	問題解決	表現（レポート）	表現（プレゼン）	協同性
目標（つきたい力）	①課題を自らたてる ②探究する意味のある課題となっている ③解明すべき範囲が明確かつ適切である（先行研究の分析を踏まえている）	①課題を「問題」に分割できている ②キーワードの定義ができている	①「問題」の選択と配列ができている ②「問題」解決のアプローチが明確になっている ③指定期間内で実行可能な計画である	①「問題」に対する答えを提示できている ②課題についてその原因を明らかにできている ③適切な分析を加えることができている ④今後の課題を明確にできている	①問題意識を明確に提示している ②問題解決の方法、経過が書かれている ③問題解決の結果がまとめられている ④今後の課題が明示されている	①発表内容を、ポスターにまとめられている ②相手にわかるように発表できている ③質問に対して応答ができている ④制限時間内で発表できている	グループ内で協力して課題解決に取り組んでいる
	〈課題発見力〉	〈論理的・多元的思考力〉	〈論理的・多元的思考力〉	〈論理的・多元的思考力〉	〈表現力〉	〈表現力〉	〈協同性〉
3（よくできている）	①自ら課題や仮説を設定している。 ②探究する意味のある課題となっている（内容が、社会的な問題・地球規模の問題と関連付けられている） ③解明すべき範囲が明確かつ適切である（先行研究の分析を踏まえている）	①課題が解決可能な具体的な問題に分割できている ②課題を解決するためのキーワードが十分に定義されている	①問題解決を進める順序が適切である ②問題に対する適切な解決方法が考えられている ③指定期間内で、時間的・物理的に実行可能な計画がたてられている	①問題に対して新たな答えを提示することができている ②課題について、その原因を明らかにできている ③答えを得るにあたって多面的な分析を適切に加えている ④今後の課題を明確にできている	①オリジナルな問題意識を明確に提示している ②問題解決の方法、経過がわかりやすく書かれている（論理的に説明できている） ③問題解決の結果が、適切にまとめられている ④今後の課題が明示されている	①発表内容を、見た目でもわかりやすいようにポスターにまとめられている ②相手に理解させることを考えた工夫も交えながら適度な大きさの声で発表できている ③質問に対して、相手に理解できるように応答できている ④制限時間を有効に使いながら発表できている	グループ内で協力しながら積極的に課題解決に取り組んでいる
2（できている）	①自ら課題や仮説を設定している。 ②課題の内容と、社会的な問題、地球規模の問題との関連が不明確。 ③解明すべき範囲が明確であるが、既存の知識をなぞるだけになっている（先行研究の分析を踏まえてない）		①問題解決の進め方は示されているが、その選択や順序には不適切なものもある ②問題に対する解決法のうちに、不適切な方法も含まれている ③実行の可能性に不安の残る計画である	①得られた答えは既存の解答の範囲を出ないものである ②課題について、その原因の一部を理解している ③答えを得るにあたって適切な分析を加えているが、一面的である ④今後の課題は認識しているが、その把握が不明確である	①問題意識を提示しているが、独自性はない ②問題解決の方法、経過が書かれているが、わかりにくい部分がある。（論理的に説明できていない部分もある） ③問題解決の結果が書かれているが、まとまりに欠けている ④今後の課題が提示されているが抽象的であり、この先になすべき見通しが明確でない	①ポスターに発表内容をまとめられている ②適度な大きさの声で、発表できている ③質問に対して、応答できている（相手の理解はともかく） ④制限時間を有効に使いながら発表できているまたは制限時間をややオーバーするが発表できている	グループ内で協力して課題解決に取り組んでいる
1（努力が必要）	何を探究したいかが不明確である	①解決可能な具体的な問題があげられていない ②キーワードの定義がない	問題の選択・配列を伴う、研究計画が立てられていない	①問題に対する答えがない。またはその答えが的外れである ②課題の原因を特定できていない ③分析が不十分である ④今後の課題も見つけられていない	①問題意識の所在が明らかでない ②問題解決の方法、経過が書かれていない ③調べた結果の羅列で終わっている（まとめられていない） ④今後の課題に触れていない	①発表に必要な内容がポスターの中に入らない ポスターを見て、話したい内容がよくわからない ②発表内容がうまく伝えられていない（声が小さい、文章を棒読みしているなど） ③質問に答えられない ④制限時間よりも時間があまり、持て余してしまう	グループの問題解決に関わりたがらない

評価対象（成果物）

S 1	なし	レポート	エビデンスノート	レポート	レポート	なし	観察
S 2	レポート（個別）・エビデンスノート	レポート（個別）・エビデンスノート	レポート（個別）・エビデンスノート	レポート（個別）・エビデンスノート	レポート	なし	なし
S 3	論文（全体的に見て） or S2評価のトータル	論文（全体的に見て） or S2評価のトータル	なし	論文（全体的に見て） or S2評価のトータル	論文	発表	なし